「ハレとケ」通信

第26号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすすめ。

物語のある建築（26）

「―修学・交流拠点の形成を目指して―

香川大学 図書館 大学会館 オリーブスクエア 改築工事」

「ハレとケ」のある 暮らしかた

【季節に応じた暮らし方／玄猪】

中津万象園「花の歳時記」

【池泉北側一帯を紅紫色の花で飾るサツキの群落】

平成27年 夏 発行

金毘羅さんの奥の院から。

金毘羅参詣が大ブームとなった江戸時代には、どんな風景が広がっていたのでしょうか。

物語のある建築（26）設計監理／(株)綜企画設計　施工／富士建設(株)

「―修学・交流拠点の形成を目指して―
香川大学　図書館　大学会館　オリーブスクエア　改築工事」

地方において、大きな期待と義務を担う“国立大学”。
「社会の変革のエンジンとなる大学づくり」というテーマが課せられた大学は、
実はハード（建物）の持つ力（利用者に働きかけ、育て、促していく）を意識的に
利用し採り入れた、まさに［建築の持つ力］を実感できる空間でもありました。
――今回は、そんな【香川大学】にまつわる物語です。

「施設同士をつなげてしまう、という計画を初めて提案したときには、みんな『何言ってるんだ』って思ったのじゃないですか。」

―そう語るのは、今回の整備工事の計画を担当した香川大学　環境管理室の堀　清隆部長だ。

オリーブスクエアを挟んで、“学問の中心”である図書館と、“生活の中心”である学生会館が接続されたこの一角では、学生たちはどこでも自分の好きな所から入り、階段を上り下りすることなく自然に行き来し、勉強したり、気分転換をしたり、刺激し合い知的な時間を共有したり…といった過ごし方をすることが出来る。

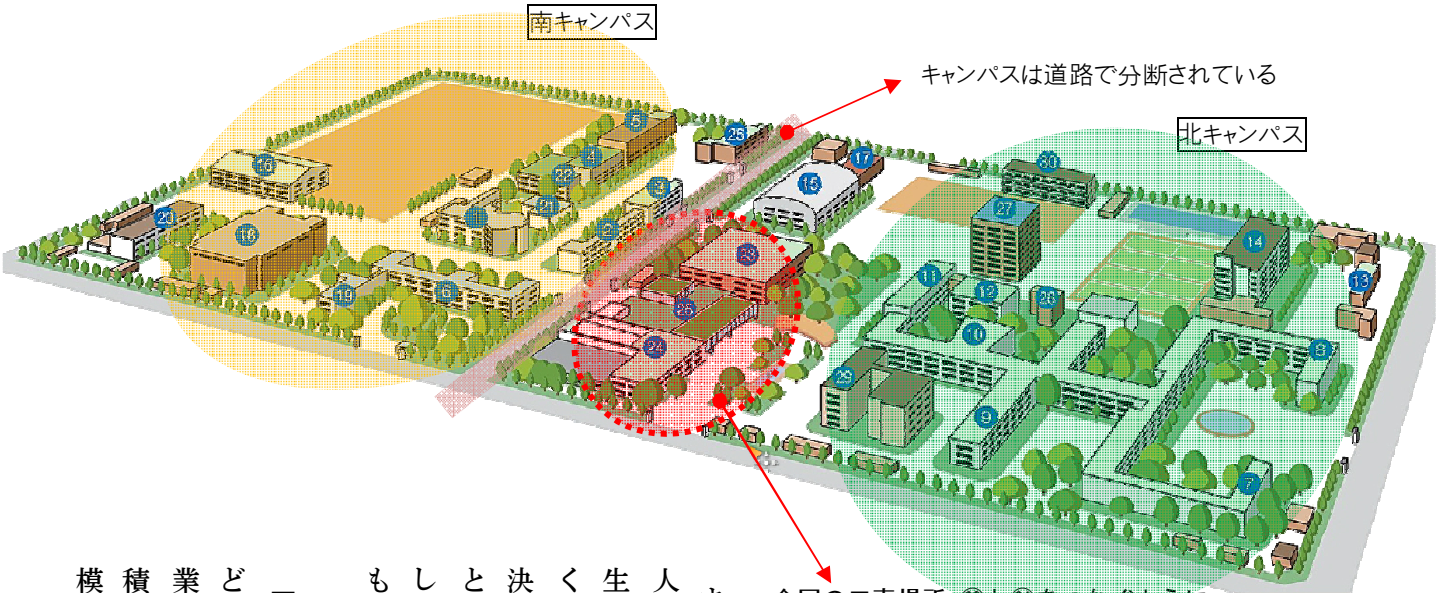
といっても、これらは全てが新規に計画されたわけではない。既存の学生会館と図書館をつなぐ位置に【オリーブスクエア】が建設されたことにより実現したという、考え抜かれた結果生まれた形なのである。（次ページキャンパスマップ参照）

大学には、国から示された「大学改革実行プラン」というものがある。二〇一三年に文科省より提示されたその大学改革実行プランを見ると、「社会の変革のエンジンとなる大学づくり」がサブタイトルとなっている。プランの中で使われている「激しく変化する社会における大学の機能の再構築」という文言からは、大変なテーマが大学に課されているということが実感できるが、少子化の進む現在、大学はその役割を担わなければ“淘汰”される可能性もある…という厳しい時代へと今や突入しているのだ。

そもそも香川大学のような国立大学には、国や県の要望を受けてその使命を果たすという一面がある。

例えば香川大学に工学部ができたのは、「香川県には理系の大学がなく、理系人材の育成が急務である」という県の要望にも応えるものだった。

香川大学　環境管理室の堀清隆 部長



今回の工事場所。㉓と㉔をつなぐように㉕が建てられた。全体で見ると、「南北のキャンパスをつなぐ」役割も果たしている。

また、「香川県の発展に寄与できる人材を育てる」という役割には、「高校生から大学生へと進学する過程で多くの人が県外へ出てしまう」ことを解決することも含まれている。当然のことながら、大学時代を香川県で過ごした人の地元への定着率は非常に高いものとなるからだ。

「地域にないと困る機能（医大など）」を担いつつ、「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」のように地域に積極的に関わっていくという方向性も模索しなければならない。

[香川大学幸町キャンパス配置図]

①幸町南1号館（講義室、演習室）②幸町南2号館（商品実験室、研究室、講演室）③幸町南3号館（研究室、講義室）④幸町南4号館（研究室、演習室）⑤幸町南6号館（法学部、連合法務研究科）（研究室、講義室、演習室）⑥幸町南7号館（経済学部、研究室）（地域マネジメント研究科、研究室）⑦幸町北1号館（自然科学教棟）博物館⑧幸町北2号館（美術教棟）⑨幸町北3号館（人文教棟）⑩幸町北4号館⑪幸町北5号館（教養教育棟）男女共同参画推進室⑫幸町北6号館⑬幸町北7号館（音楽教棟）⑭幸町北8号館⑮第一体育館⑯第二体育館⑰武道場⑱講堂⑲又信記念館（実習室、演習室）⑳課外活動共用施設㉑保健管理センター㉒幸町南5号館、総合情報センター㉓図書館㉔大学会館、キャリア支援センター㉕OLIVESQUARE（学習ラウンジ、ｲﾝｸﾞﾘｯｼｭｶﾌｪ、教員交流ラウンジ、多目的ホール）㉖交友会館（経済研究室、演習室、自習室）㉗研究交流棟、生涯学習教育研究センター、大学教育開発センター、留学生センター、アドミッションセンター、大学連携 e-Learning 教育支援センター四国㉘附属教育実践総合センター㉙大学本部㉚若草寮

これまで以上に人材育成機能についても厳しく問われる時代にもなる。

今、国立大学は非常に大きな役割と難しい舵取りを求められているのではないか―堀部長のお話を伺いながらそう実感したというのが、正直な感想である。

実は、今回の整備にあたり、「老朽化した大学会館を建替えしてはどうか」という意見もあった。

しかし、予算的な問題や、これから大学に求められる観点を勘案した結果、早期に実現可能で投資から得られる効果性の高い、コンパクトな計画を目指すこととなった。それが、「施設同士を有機的に結合することで、新たな展開を見出すことができるのではないか」という発想を生んだ。

「既存の建物を改めて眺めてみると、大学会館の2階にあった集会室は、サークル活動以外ではあまり使われていませんでした。それなら、それを学生からの要望が多いカフェに改修して、各施設の2階にある一連の空間を居心地の良いモール（遊歩道）でつなげば良いのではないか、と考えたのです。」。

それが冒頭にあった、「みんな『何言ってるんだ』って思ったのじゃないですか。」と堀部長の語る計画の基本である。

さまざまな役割を持つ一連の空間を結合し、行き来をさせるというその計画は、学生にある行為や意識変革を「促す」という機能をもっている。

例えば、「学生同士の交流」を促す機能。図書館＝静かな場所、という既成概念から一歩踏み出し、［ラーニングコモンズ（共有学習スペースといったイメージ）］、［アイデアひらめきコーナー］を配することで、図書館の一角を「自発的に交流し、人・モノ・地域・研究がひとつに集まる仕掛け」へと変化させた。それはまた、修学時間の飛躍的増加、学習環境整備という大学改革の目的をも体現している。

そして同様に、留学生と日本人学生が自然にコミュニケーションをとることができるよう［イングリッシュカフェ］を設けたことで、「学生のグローバル化」も促している。

海外の文化や語学への苦手意識を無くすために“混在化”する場をつくったことで、“グローバル化に対応した人材育成として国際化の飛躍的推進”という大学改革の目標を実現させる仕掛けとしたのだ。

この“混在化”という言葉はあまり耳なじみがないかもしれないが、企業によっては、留学生と日本人学生が寮などで混在化した環境であったかどうかを重視し、それを満たしている学生については、グローバル人材として優先的に採用するという流れも生まれつつあると言う。そしてそれは、都市圏だけでなく地方においても同じ。“国際寮”が再び注目され始めているのだ。

［ラーニングコモンズ］、［アイデアひらめきコーナー］、［イングリッシュカフェ］。これらの“場”を使った仕掛けは、まさに「ハードが学生を育て、促していく」ための工夫と言えるだろう。

とはいえ、新築ではなく、既存の建物を上手く利用しながら、求める機能を実現することが必要だった今回の計画。理想の形を実現するために、活躍した方がいる。グループリーダーの伴 佳英氏である。

「伴リーダーは京都大学の宇治おうばくプラザを担当されたことがあり、経験値が豊かで課題解決力に長けています。判断のスピードも速いし、今回の計画を“形にする”ことを実質的に担ったのは、伴リーダーだと言えますね。」（堀部長）

何らかの行為や変革を促されるのは学生だけではない。大学会館には、［教員交流ラウンジ］として、教員同士がくつろぎを通して交流し合う場も設けられている。モデルイメージとして堀

学生支援センター１階ホール１－２

交流プラザ２階センターモール

交流プラザ２階センターモール

学生支援センター２階ホール　カフェ

図書館２階　メイン通路

図書館２階　アイデアひらめきコーナー

グループリーダー 伴 佳英氏

部長の脳裏にあったのは、京都市西京区にある[国際日本文化研究センター]だ。

研究の合間にリラックスしたり、話し合ったりする[コモンルーム]を設けることで、異分野の研究から刺激を受け、新しいものを生み出していく。―その雰囲気と流れを香川大学にも創り出すことを目指して、交流ラウンジを設けた。もちろん、議論が生まれたときにすぐに興味を深められるよう、情報ネットワーク等の設備も整えられている。それについて、堀部長はこう語る。

「香川大学には、こういった交流のためのコモンスペースはなかったのですが、国際日本文化研究センターというお手本があったことから、先生方の共有スペースを作りたいと考えたのです。

他領域の先生と交流し、共同研究を行うことから芽が出るものもたくさんあります。香川大学の例でいえば、希少糖研究や微細構造デバイスの研究がその一例です。

ある領域で見付かった研究成果が、他領域で発展したり応用されたりすることで、さらに大きな波及効果を生む。これは今、とても注目されている流れなのです。その流れを作るためには、分散したキャンパス間での交流が重要で、まずは研究室から出てきていただかねばなりません。これは、中々難しいことですが…。」

そしてもう一つ、大学には期待される大きな役割がある。それは「地域活性化の中核的拠点」としての方向性である。

これについては、“地域のニーズに応じた人材育成拠点の形成”と“地域社会のシンクタンクとして様々な課題を解決する地域活性化機関としての役割”が主な項目として示されているが、すでに香川大学では“自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地(知)の拠点事業”として多くの自治体と大学(学生含む)との取り組みが始まっており、その活躍ぶりは目にする機会も多い。

また、今回整備されたオリーブスクエアの[多目的ホール]では、講演会やシンポジウム、人的交流を目的とするレセプション等も行えるようになっており、ハード面でも準備は整っている。

【大学改革実行プラン(文科省)】を見るかぎりでは、大学には「人材育成」と、「大学の役割の進化」の両方が求められているように感じられる。それぞれ範囲の広い目標であり、さまざまな解釈があると思われるが、“大学の機能の再構築を通じて社会の変革のエンジンとなる”ことには、学校側が直接的に行える取り組みと、学生を通じて実現されることとの両輪があるように思う。

今回の建築計画は、その後者を「ハードの環境を整えることにより促していく」ということを主眼としているといえるだろう。

そしてその効果は存分に発揮され、これからの香川を支える力となっていくに違いない。

→“現場の苦労話”に続く

全景

交流プラザ外観

交流プラザピロティ

交流プラザピロティ

学習交流プラザから南キャンパスを望む

学習交流プラザから南キャンパスを望む

―現場担当者のお話から―

“現場の苦労話”を教えてもらおうと、当時、香川大学の工事現場を担当した、香川大学の長尾達也サブリーダーと、弊社の監督3名とに、対談）をしていただきました。

「とにかく大変だった！」というその訳は…？詳しいお話を伺ってきました。（文中敬称略）

＊＊＊＊＊＊

――新設したカフェ、賑わっていますね。パンもおいしそうで、学外からも人が来ているようでした。

西尾「そう、ここのパンは焼きたてでおいしいですよ。」

長尾サブリーダー「一階にはうどんの製麺機も入ってるんですよ！」

――私が大学生だった頃には、どこもこれほどには居心地が良くなかった気がします（笑）。今回の現場は、とにかく大変だったと聞いています。それはなぜでしょうか？

大西「一番大きいのは、契約・着手前に『どのくらい工期がかかるか』を図面から読み取れなかったものが多かったことですね。設計図の収め方も特殊でしたし、職人さん（専門業種）にとってさえも初めてのことが多かったので、当初『このくらいかな』と想定していた工期では実際にできないことが多かったんです。」

サブリーダー　長尾　達也氏

――でも工期内で収めましたよね？

大西「それは当然そうです。だから、『一日をどうやって縮めるか』をひたすら考えていました。」

――どうやって縮めるんでしょう？

大西「工法の検討、本当にこのプロセスは必要か？の再検証、材料の再考…。香川大学さんの方も、『この工期では厳しい』ということを分かってくださっていたので、提案しては検討・決定・段取り手配・実施…と毎日追われていました。」

――なるほど。

西尾「もうとにかくこの頃は『打ち合わせ議事録』を見るのが嫌で嫌で…（笑）。打ち合わせの中で出た提案・変更を実行していかなきゃいけないわけですけれど、工期がないので、それを実行に移すための猶予期間が全くないわけです。特に、構造等の変更にかかわる場合は、関係各所に問い合わせて、確認してもらって、返事が来たら方針を決定して、すぐに手配する。手配するといっても、その頃は入札案件の“不調不落”が続いていたほどの職人不足、材料不足の時期です。いったい協力業者が本当についてきてくれるのか？、必要な材料は揃うのか？、…大変すぎて、打ち合わせ議事録の確認作業が辛かったです。」

長尾サブリーダー「時間が掛かるのも分かっていたから、夜19時くらいから腰据えてやったりね。」

――目に浮かぶようですね。

長尾サブリーダー「しかも、“大学ならでは”の事情もある。」

――大学ならでは？

多田「たとえば、イベントがあるときには、構内での作業は難しい。特に困ったのは、試験です。試験期間中は音などで学生に不利な状況を作ってはいけないから、工事を中止するのはもちろん、現場自体に立入禁止になってしまったことも。『立入禁止は困るので、頼むから現場に立ち入らせてください！』と必死でお願いして…。」

――なるほど。

長尾サブリーダー「富士建設の会長が『うちのエースを出すから、安心して任せてやってください。常務の米田も入りますから。』と言っていたのが印象的だったけれど、確かにこのメンバーじゃなければできなかったでしょうね。」

――ありがとうございます！

○香川大学
グループリーダー／伴　佳英　氏
サブリーダー／長尾　達也　氏

○富士建設
統括／大西正人（課長）
学生生支援センター／多田康乗（主任）
図書館担当／西尾孝弘（主任）
交流プラザ担当／

対談を終えて。写真上/長尾氏、西尾・下/大西、多田

この季節を暮らす。（26）

【季節に応じた暮らし方／玄猪】

香川県立文書館史料集3【丸亀京極家御連枝日記】を読んでいると、万延元年十月三日に『三日、玄猪ニ付、晩方祝致候。拙者表居間ニ祝致候。奥奥居間、於徳中奥祝致候事。』という記載があります。

この日はちょうど【癸亥】で、亥の日。『晩方祝致候』とあるのは、亥の刻が夜10時頃であることによるのでしょう。現在は玄猪といえば『亥の子餅』というお菓子くらいでしか耳にすることはありませんが、古くから根付いた季節を代表する行事です。

◆具体的には何をしていたの？

この日記の記載で気になるのは、表居間、奥、中奥・・と別々に祝いがされていること。

平安時代に書かれた源氏物語に登場する亥の子餅は宮中行事のひとつであり、光源氏から紫の上への贈り物で（葵上の喪中のため密かに贈られた）、『その夜さり、亥の子餅参らせたり。かかる御思ひのほどなれば、ことことしきさまにはあらで、こなたばかりに、をかしげなる桧破籠などばかりを、色々にて参れるを見たまひて・・・』とあり、わざわざ部屋ごとに祝いをせねばならないような理由は見当たりません。

その後、鎌倉時代に入ってから、武家、猪は多産であることから子孫繁栄を願う意味を込めて武家においても『亥の子餅』を食べる習慣が生まれ、江戸時代には玄猪の祝いとして定着しました。

その頃には、『亥は陰陽五行説では水性に当たり、火災を逃れる』という信仰から、亥の月の亥の日を選び、囲炉裏や炬燵を開いて鍋をかけ、火鉢で火を盛る風習ができたそうで、この【丸亀京極家御連枝日記】に記載のある『部屋ごとの祝い』は、つまりその『炉開き』のことなのかもしれません。

ちなみに、茶の湯の世界でも、この日を炉開きの日としており、お茶席では『亥の子餅』が出されます。

◆亥の子餅とは？

その『亥の子餅』。特に決まった形はないようで、このあたりで見るお菓子の形から猪に似せた形を連想しながらインターネットで検索してみると、“古くは、大豆・小豆・大角豆・胡麻・栗・柿・糖（あめ）の七種の粉を入れた餅をついた”、“宮中では黒・赤・白の三色の餅が作られた”、“江戸時代には将軍から白・赤・黄・胡麻・萌黄の五色の鳥の子餅を拝領した”など、様々な種類に驚かされます。

現在は和菓子店それぞれの味で作られているようですが、老舗の有名店・とらやの場合には、“鎌倉時代の文献にある製法を参考に、きな粉・干柿・黒胡麻を混ぜ込んだ餅製の生地で御膳餡を包んだもの”として作られているそうです。（ホームページより引用）

◆江戸時代の秋の年中行事

江戸時代、その他の秋の年中行事と言えば、有名なのが『観菊、菊酒』。

前述の日記の安政三年十月の欄にも「十八日昼　早支度ニ而、金倉之茶屋江、拙者歩行致候。拙者羽織袴ニ而、駕ニ而参り候。金倉江参り、夫より南カモ江白衣ニ而、内々菊を見ニ参り候事。」という記載があり、当時の風情が偲ばれます。

ただ、ここでまた気になるのは、なぜ『白衣』なのか。『白い』という言葉には『良い・美しい』という意味があったと言いますから、綺麗な衣で・・・といった意味でしょうか。あるいは、『白衣役』というとお付きの中でも身分の低いものを指したそうですから、反対にカジュアルな恰好で・・・という意味なのでしょうか。色々調べてみましたが、残念ながら分かりませんでした。

玄猪餅や炉開きは、今は十一月に行われていますので、まだこれから。

今年はそんな楽しみ方をしてみるのも素敵ですね！

中津万象園

「花の歳時記（26）」

池泉北側一帯を紅紫色の花で飾るサツキの群落

新緑に映える池泉（八景池）北側一帯をあでやかに飾ったツツジからバトンを受け、紅紫色のサツキの花が眩しい五月の陽光を浴びて一斉に咲きそろいます。それは配色の妙を得ていることと、その株数の多さとを総合して"見事の一言"に尽きます。

サツキはツツジと同じく、池泉北側の芝生広場に植栽されているほか、園路南側の池泉沿いにも池水をのぞき込むかのように絶妙に植栽されています。（写真参照）

このサツキは日本原産で、その野生種は関東地方の西部から近畿地方までと、中国地方の山口県、九州、屋久島等で、いずれも雨量の多い深山の、渓流に沿った岩肌に自生していますが、四国には自生種はありません。このような渓流沿いの植物を「渓岸植物」と呼び、その代表種がサツキであります。

万象園の植栽管理は非常に良いのでサツキの開花状況は申し分ありませんが、あえて芝生広場のサツキと園路南側池泉沿いのサツキとを比較した場合、後者に一分の利があります。それはサツキが渓岸植物であることを理解しますと容易に納得できます。

最後にサツキとツツジとの見分け方をお話しましょう。サツキはサツキツツジの別名があるように、この両者は共に植物分類上ツツジ科・ツツジ属にあり、外観上判定は困難ですが、開花状況に違いがあります。すなわちツツジは開花後に新葉が開きますが、サツキは新葉が開き終わってから開花をします。従ってサツキの開花期は、ツツジの開花期よりも一般的に20日～1ヶ月ほど遅れるのが通常であります。**（長岡　公）**

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路
坂出北ICより約 8.5km／約 15 分
坂出ICより約 14km／約 20 分
高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分

【長岡　公　氏】
昭和 2 年 10 月　香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和 26 年 3 月　鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和 26 年 4 月以降
香川県公立高等学校教員として主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和 63 年 3 月　定年退職　香川西高等学校教頭
現在　公益財団法人中津万象園保勝会　理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林・玉藻編／中・西讃編）がある。

雅題　文人華の世界（4）

「秋色争妍」

葛、野菊

万象園の茶亭・観潮楼にちなんで、文人の「華」の世界をご紹介します。秋がやってくると、荒れ放題に見えた原っぱにもチラホラと紫の葛の花穂が伸び、足元には小さな野菊が咲く風景が見られます。そんな秋の野で野趣を競う2種の草花を表現する花がこの組み合わせです。

【編集後記】地方創生に的を絞ったクラウドファンディング、FAAVOの香川県での業務受託先として、この度、富士グループが手を挙げることとなりました。（＊全国版　https://faavo.jp/）

「なぜこれを当社のような中小企業がやるのか?」の理由は多くあるのですが、単なる社会貢献への熱い想いだけではありません。きっかけは、自分たちの地域の15年後の姿について、数字で具体的に知ってしまったこと。この状態になったとして、果たしてここで企業は生き残れるのか!?と愕然としましたし、税収もマンパワーも減っていくなら、企業や市民が地域の担い手になるしかない、と実感しました。

では何をすべきか…と考える中で、まちのために、色々な活動や取り組みをしている人たちが予想以上に多くいることを知りました。それなら、その人たちを、その地域に縁のある人々が応援できる仕組みを作ろう。それができれば、Uターンの動機付も地域の活性化も創業（雇用・産業の創出）も様々な可能性が展開できる。—それがFAAVOの業務を受託する理由です。

私たち中小企業は、地域と直結しています。社員と家族、協力業者とその家族と数え上げればおそらく数千人規模で関わり合っています。だからこそ、市民、企業、行政が連携しあって社会を支えて行く仕組みが絶対に必要で、その自覚を企業は益々持たねばならない—そう信じています。

**********御意見、御感想をお聞かせ下さい**********

建設業許可：香川県知事許可（特 23）第 189 号／一級建築士事務所：香川県知事登録　第 416 号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第 1997 号

FUJI

富士建設株式会社

本社：〒769-1101 三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588（0120-832589）
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail　y-manabe@fujikensetsu.jp　（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。
また、県下において 1300 区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処　懐風亭